

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

民族間関係と『歴史』の記憶： 徳宏タイ族のエスニシティと民族的境界をめぐって

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長谷川, 清 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00002304 |

民族間関係と『歴史』の記憶 ——徳宏タイ族のエスニシティと民族的境界をめぐる

長谷川 清*

1. はじめに

グローバリゼーションや市場経済化の進行とあわせ、国内に多くの民族集団やマイノリティをかかえる多民族的な国家にあつては、文化多元主義にもとづく国家統合の実現をめざして、国家と民族の関係を再検討する議論が活発になっている。圧倒的な多数をほこる漢族の存在とあわせて、55の少数民族をかかえる中国の状況についてみれば、「中華民族」の一体性と多元的な形成過程にかんする理論的な検討[費孝通(編)1991]、国境を跨いで分布する「跨境民族」[申・劉1988、胡1995]、あるいは「跨界民族」[金・王1994]の形成と国家体制内における彼らの政治的・経済的・社会的状況、エスニシティの編制と動態などをめぐる比較研究の出現は、1980年代以降における中国内外の政治・経済的、社会的状況の変化のなかで、国家と少数民族の関係をあらためて問いなおす試みとしての意義をもつ¹⁾。

こうした問題関心のもとで提起される研究課題は多岐にわたっているが、周辺民族にとって国境画定が民族集団の形成とその分化過程に与えた影響が検討されるとともに、近年の市場経済と対外開放の動きのなかで、こうした周辺民族が複数の国家を媒介する存在としていかに重要な意義を担うかなど[劉1994]、これまでの人類学的研究ではあまり議論されることのなかった問題もあげられている。

ところで、本報告は、中国西南部から東南アジア大陸部にかけての国境地帯に分布する周辺民族のエスニシティの編制様式と動態の解明を最終的にめざしており、そのための事例研究として、雲南・ミャンマー境界地帯に位置する徳宏タイ族チンポー族自治州のタイ系民族を扱うものである。彼らはタイ・ヌー Tai Noe と自称する集団であるが、タイ系諸族は雲南から東南アジア大陸部、インドのアッサム地方にまで広範に分布し、多様性と地域的分化が顕著である。したがって、タイ Tai としての同類意

* 岐阜聖徳学園大学

1) 中国大陸の周辺部に多数分布する諸民族のうち、中国と国境を接する周辺国家にも居住し、中国側の少数民族と言語・民族系統的に同一とされる民族集団には、「跨境民族」もしくは「跨界民族」という概念化がなされているが、両者の概念には若干の差異がある。

識と汎タイ意識を国境を越えて保持しつつも、帰属する国家の政治的・経済的・社会的システムの影響のもとに多様なエスニシティの表出様式が指摘されている²⁾。

以下では、筆者がこれまで実施してきた徳宏地区の芒市および瑞麗地区での現地調査の資料にもとづき、雲南・ビルマ境界地域のタイ系諸族をめぐる民族間関係、中国王朝が周辺民族に及ぼした政治的・文化的影響、エスニシティの編制のあり方などについて検討したい。

2. 雲南のタイ系諸族の研究概況

中国国内のタイ系民族にかんする民族学・人類学的調査研究は、中国西南部の少数民族に対する関心が高まった中華民国期の1930年代後半に始まった。その後、新中国が成立すると、中国全土の少数民族を対象として、民族識別工作や封建的な階級関係、社会経済的状况の現状理解を目的にした「社会歴史調査」が実施され、雲南・東南アジア国境地域の諸民族もその対象となった。その結果、タイ系諸族にかんしていえば、中華人民共和国を構成する「少数民族」の一つ、タイ族 Dai Nationality [中国少数民族編写組 1981:339-349, Ma 1985]の地域差や「支系」の文化的特徴、政治的・経済的・社会的状況が明らかにされた³⁾。また、こうした調査研究とあわせて、タイ系諸族の民族起源と民族形成にかんし、従来、南詔王国をタイ系民族の建国したとする見解、いわゆる「南詔タイ族説」への反論も集中的になされている [賀 1990]。その際の論点は、元朝の雲南征服によってタイ系諸族が南下移動した形跡を漢籍文献にみいだすことはできず、古くから現在と同じように、雲南・東南アジア大陸にすでに弧形状に分布していたというものである。

さて、本論の展開にさしあたり必要なのは、以下の3点である [傣族簡史編写組 1986、喻・羅 1980、馬・繆 1989]。

①雲南のタイ系諸族は、タイ・ルー Tai Lue、タイ・ヌー Tai Noe と自称する下位グループに大別されるが、この他にタイ・ヤ Tai Ya、タイ・ポム Tai Paum などがあ
る。この他きわめて少数であるが、タイ・タウ Tai Tau と称するグループが雲南・ビ

2) 雲南・東南アジア大陸部における所与の国家体系内におけるタイ系民族のエスニシティの多様性やそれぞれの状況については、綾部 1996、馬場 1993、長谷川 1995、高谷 1993、Wijeyewardene 1990などを参照。

3) 中国におけるタイ系民族の研究史は、未成 (編) 1995に詳しい。

ルマ国境地帯に居住している⁴⁾。

②タイ・ルー、タイ・ヌーの両グループは言語学的にも区分でき、タイ・ルーは「西双版纳方言」を構成する。西双版纳タイ族自治州(シプソンパンナー、Sipsong Panna)を中心に分布し、思茅地区、紅河、文山にもいる。これに対し、タイ・ヌーは「徳宏方言」を構成しており、徳宏タイ族チンポー族自治州を中心に、保山、耿馬、双江、滄源、鎮康、景谷、景東などの各地区・県にも分布する。

④タイ系諸族の民族名称(他称)にかんしては、雲南地方を対象とした漢籍文献のなかに早くから登場しており、主なものを取り上げただけでも、宋・元代には「金齒、白夷」「白衣」、明代には「百夷」(大百夷/小百夷)、清代には「擺夷」(水擺夷/旱(漢)擺夷/花擺夷)などがある。

雲南のタイ系民族にかんするこれまでの研究は、民族史的再構成を目的とし、漢籍文献のなかに散見する族称(他称)を社会発展の時間軸のなかに配列することに主眼があった。しかも、そうした民族史的研究は、漢族あるいは中国王朝により、外側から境界づけられた名称(他称)だけを史料化された正統な歴史記述として実体化し、それを固定的にとらえる傾向を強くもっている。

これに対し、外側からの〈名付け〉により民族形成が進行する過程の分析とあわせて、民族間関係や諸民族の社会的相互交渉の過程からおこる民族形成の内的側面、すなわち内側からの境界づけ、民族的境界の形成と〈自己意識〉の編制にかかわる政治的・文化的力学の解明は不可欠である。タイ系民族にそくしていえば、民族識別工作によって発見されたタイ・ルー、タイ・ヌーなど、タイ族内部の下位グループにおける自己意識の形成と民族的境界、民族間関係などにかんし、細かな検討が必要なのである。

3. 徳宏タイ族チンポー族自治州における民族間関係

(1) 「徳宏」という地域概念

徳宏タイ族チンポー族自治州は1953年に成立した。「徳宏」という地域概念は、タイ語のタウ・ホーン *Taw Xong* (怒江の下方、南方の意味)に由来する。徳宏地区は、サルウィン川が域内を流れ、タイ系諸族の生活空間としての山間盆地(ムアン)を点

⁴⁾ タイ・ヌー、タイ・タウの表記を便宜的にそれぞれ *Tai Noe*、*Tai Taw* としておく。

在するなど、ビルマ側のシャン州 Shan States とは自然地理、生態系、民族分布などにおいて連続性をもち、歴史的展開過程においても密接な関係がある。

14世紀以後、徳宏地区からシャン州にかけて、ムアン・マオ王国の勢力が台頭したが、中国王朝はこれを契機に大軍を派遣し、ムアン・マオ王国の解体と分割支配をかけた。王朝の間接支配は、明・正統年間（15世紀）における「三征麓川」と呼ばれた軍事的征服により確立され、その結果、南甸、干崖、隴川、盞達、遮放、芒市、勐卯、戸撒、臘撒、勐板の10土司が置かれた。これらの土司は一部を除き、土着のタイ系首長である〔尤 1987〕。

徳宏地区はビルマ、インド方面にいたる内陸交易ルートの中継地点にあたり、古くから漢族が進出していたが、雲南行省の設置以後、中国王朝とビルマ王朝は経済的交流を深めると同時に、しばしば軍事的にも対立した。その結果、徳宏地区もふくめてタイ系諸族の分布する辺境地方には屯田政策が推進され、漢族の移民が継続的に行われていく〔江 1986〕。1885年ビルマの植民地化により、イギリスと清朝政府とのあいだで国境画定が進行し、この地域のタイ系諸族は、中国およびイギリス領ビルマという、異なる支配体制のなかにより実質的に編入されていくのである〔長谷川 1994〕。

（2）民族間関係と漢族の移住

徳宏タイ族チンポー族自治州の政治社会状況は、自治州の成立以前と以後では質的な相違があり、それは民族構成状況に端的に示される。民国27年（1938）の時点では、徳宏地区の総人口は165000人で、その内訳はタイ族82000人（49.6%）、チンポー族25000人（15.1%）、リス族20000人（12.1%）、ドゥアン族5000人（3%）、アチャン族1000人（6%）、漢人23000人（13.9%）、という状況である〔雲南民政廳邊疆設計委員会 1944:171〕。これに対し、1994年末の統計によれば、自治州の総人口は95.21万人、そのうち少数民族人口は49.33万人を占めている。各民族の人口は、タイ族30.47万人（32%）、チンポー族11.81万人（12.4%）、アチャン族2.47万人（2.59%）、リス族2.78万人（2.39%）、ドゥアン族1.21万人（1.27%）、ワ族735人（0.08%）、漢族45.89万人（48.19%）である〔徳宏年鑑 1995:352-353〕。

解放以前の段階では、タイ族が人口的に半数を占め、漢族の人口比率は比較的低い段階に止まっていたが、それは漢族が「瘴癘」を恐れ、漢人はタイ族の居住する山間盆地の内部に定着することを避ける傾向があったからである。また、定着的な集落を構成する場合には、気候的に涼しい山間部に形成されるのが一般的であった。交易者としての漢族は、乾季に徳宏地区の山間盆地にやってきて日用品、生活雑貨などを販

売し、翌年の3、4月頃、雨期の始まりの前には郷里に戻ったのである。こうした季節的に往来する漢族の交易者は「走夷方者」と呼ばれた〔江 1992:74〕。

徳宏地区の漢族の分布状況には地域差があった。1930年前後の時期にかんし、漢族の人口比率をみると、南甸土司地区が60%であり、以下、戸撒30%、盞達30%、芒市30%、遮放15%、干崖10%、隴川8%という状況である。特に瑞麗（ムアン・マオ）は極めて少数の漢族しかいなかった。こうした数字には、雲南からビルマ方面へいたる内陸交易ルートの重要拠点、すなわち保山および騰冲到隣接する地域では漢族の人口がわりあい多かったことを示している〔方克勝 1985:218-221〕。

徳宏地区の各民族の人口比率はその後、大躍進以降の国営農場の建設、文化大革命期における下放政策の実施により、中国内地の漢族が大量に移住することにより、漢族とタイ族の勢力関係が逆転し、ついにタイ族のそれを上回るようになった。

4. タイ系諸族における〈自称〉と〈他称〉

(1) 他称としてのパイ・イ Pai-i

徳宏地区からシャン州にかけての地域は、歴史的には中国王朝とビルマ王朝の政治的ななほさまに位置している。中国王朝および漢族は、漢文化の優位性と中華意識を背景に、周辺部の諸民族を名付けて分類するという形で、多くの書かれた記録を残してきた点は注目に値する。タイ系諸族に対する中国王朝側からの他称の歴史の変遷は以下の通りである〔尤 1984、喜田 1980〕。

13世紀に入り、雲南行省を設置して内地化を進める元朝は、東南アジア大陸部への政治的関心も強めていくが、当時、サルウィン川流域および瀾滄江流域の山間盆地や河谷平野に勢力を伸ばし、政治統合化の動きが活発であったタイ系諸族に対し、「金齒」「百夷」などの名称で呼んだ。さらに明代になると、「百夷」はタイ系諸族を表す総称として定着し、しばしば「大百夷」「小百夷」に区別された。清代には、タイ系諸族は「擺夷」と総称されるにいたり、その内部が「旱（漢）擺夷」「水擺夷」「花擺夷」と分類されるようになったのである。

さて、このなかで重要なのは、旱（漢）擺夷と水擺夷である〔孫・張 1987〕。漢籍史料によれば、旱（漢）擺夷は河川にそった平地ではなく山に居住するグループで、その性格は勤勉である。これに対し、水擺夷は河川の近くで草ぶきの家屋に居住し、心理的属性は柔弱であるという。こうした対照的な属性をもつ、「水／旱（漢）」の分類カテゴリーは現在においても有効性を失っておらず、漢族の側も、タイ族の側も日常会話のなかでしばしば用いている。

このような中国および漢族の側からの〈名付け〉としてのタイ系諸族の名称は、民国期でもそのまま踏襲され、タイ系諸族はパイ・イ（擺夷・擺彝）と総称されている。この時期の欧米人による民族誌的記述に現れる *Pai-i*、*Pai-yi* などは擺夷（彝）のことである。新中国の「民族識別」により、それ以前の他称は正式に廃止された。

(2) シャン Shan という呼称

ビルマ人はビルマ国内および中国領に居住するタイ系諸族を総称する場合にシャン Shan という名称を用いる。この言葉の由来ははっきりしないが、Siam、Assam、Ahom などと同源とみられている[プーミサック・坂本 1992]。ビルマを植民地化したイギリス人もこれを採用し、こうしてシャンという名称が普及したのである。リーチは、シャン族における最も重要な民族的アイデンティティの根拠として、シャン族がすべて仏教徒であるということ、およびシャン族の集落ではすべて、水稻耕作が行われるということの2点をあげている。そして、ビルマ国内のシャン族と呼ばれるグループは、ビルマ系シャン（シャン・バマー、Shan B'mah）、中国系シャン（シャン・タヨク Shan Tayok）、カムティ・シャン Khamti Shan、という3つのグループに区別されるといふ。ビルマ系シャンとは、ビルマ系シャン諸国家のシャン族を指し、サオパ Saopa と呼ばれる「王」は名目的にはビルマ王に従属してきたグループである。中国系シャンは雲南側のシャン諸国家で、その主要なものは騰越の南、サルウィン川の西にいる。ビルマのパモーおよびミッチーナ地区に居住するシャンの多くは雲南側から移住し、ビルマ人によって中国系シャンとして分類されている。カムティ・シャンはビルマ系シャンの亜型であり、かつてモウガウン Mougauing (Mong Kawng) に政治的忠誠をたもってきたシャンである [リーチ 1987 : 35-40]。

(3) 政治的境界とタイ系諸族の差異化

パイイにしても、シャンにしても、それらの名称にいずれも共通するには、その内部がいかにかに分化し、差異化されていようが、自らをタイ Tai と名乗るタイ系民族の側からすれば、外側からの〈名付け〉によって、まさしく実体化してきた分類カテゴリーだという点である。しかし、こうした外部からのまなざしは、中国とビルマという、二つの政治的社会的区分に対応してその政体をたもってきたタイ系民族の側に、自己意識の生成や編制に作用し、大きな影響を及ぼすことになるのは当然である。

中国とビルマの国境画定が進行し、ビルマ領のシャン州 Shan States と中国領のシャン州 Chinese Shan States という、領土的にも区分された19世紀後半の状況にあつて、

双方のタイ系諸族が互いをどのように認識しあっていたかについて、ビルマから雲南までを詳細に踏査したデービスは、以下のような注目すべき内容を記録している。

「シャン族が自称する名称は、タイ Tai である。シャンという名称は、ビルマ語の名前で、多くの少数民族もこの名称の変種を用いている。雲南省のシャン族は、中国人からパイ・イ Pai-yi と呼ばれている。雲南省のシャン族は、その大部分がシャン・ステーツに居住し、タイ・チェ Tai Che、タイ・ケ Tai Hke あるいは中国系シャン Chinese Shans と呼ばれている。しかしながら、中国系シャンは、一般にこの名称を用いることなく、ナイ・ヌー Tai No すなわち北方シャン Northern Shans と名乗っている。これに対して、シャン土侯国の住民は、タイ・ロン Tai Long すなわち大シャンを自称しているが、国内のシャン族は、彼らのことをタイ・タウ Tai Tau、すなわち南方シャン族と呼んでいる。わずかのタイ・タウは雲南にも居住し、孟定 Meng-ting にいる。また、孟連 Mong Lem にタイ・レム Tai Lem が住んでいる」 [Davis 1970:377-381]。

ここにおいて示される、雲南・ビルマ境界のタイ系民族のあいだで用いられた自／他の相互認識にかかわる諸種の分類カテゴリーについて、筆者は徳宏地区の現地調査によって、大枠においては現在もなお通用する点を確認できた。タイ族はビルマ人をマン Man、漢族をシェ Hsie と呼んでいる。中国のタイ族とビルマのタイ族と区分することも当然起こりうる。中国のタイ族は、ビルマ側からすれば、シャン・タヨク Shan Tayok (中国のシャンの意味) となるわけである [孫・張 1987:4]。

しかし、こうした中国とビルマの政治的国境に対応した名称の生成以上に興味深いのは、中国側のタイ族は自らをタイ・ヌー Tai Noe (他称はタイ・チェ Tai Che、タイ・ケ Tai Hke) を自称し、ビルマ側のタイ族 (自称はタイ・ロン Tai Long) に対し、タイ・タウ Tai Tau と呼んでいることである。中国側とビルマ側のタイ民族のあいだで作動している、タイ系民族の内部の差異化と境界づけ、相互認知と自己意識化のメカニズムは、徳宏地区のタイ族のエスニシティ論の核心にかかわる重要な問題なのである。

5. タイ・ヌーの〈自己意識〉と「漢化」

(1) タイ・ヌーという自称と自己同定

これまでの研究によると、徳宏地区には、人口的には圧倒的多数のタイ・ヌーと少数のタイ・タウの二つのグループがおり、後者は瑞麗、ワンディン、隴川、遮放の一部地域にのみ分布すると説かれてきた。タイ・ヌーとは「上方のタイ」、タイ・タウと

は「下方のタイ」を意味し、前者は漢族の分類では「旱タイ」、後者は「水タイ」であるという [馬・繆 1989:1-4]。

しかし、タイ・ヌー/タイ・タウの区分が、いかなる根拠にもとづいたものであり、シャン族を主体とするビルマ側のタイ系諸族といかなる関係にあるのかについては不明な点が多い。こうした状況に対し、筆者のこれまでの現地調査で鮮明になってきた点は、以下の各点である。

①徳宏地区のタイ族は、ビルマ側のタイ系民族（シャン族に相当する）をタイ・タウと認識するという対比関係により、自らをタイ・ヌーと名乗るということ。目下のところ、タイ・ヌーとタイ・タウという分類カテゴリーは、あくまでもタイ・ヌーと自称するグループ内部で通用するカテゴリーであると考えられる。タイ・タウは基本的にビルマ側のタイ族を指すものであるから、徳宏地区にタイ・タウが分布するにしても、ビルマと国境を接する地域など、きわめて限定されている⁵⁾。

②ヌー（上流、北方の意味）は、怒江（サルウィン川上流部）の上流地域、タウ（下流、南方の意味）は怒江の下流地域、すなわちサルウィン河流域地方を指すこと。タイ・ヌーを自称する人々には、自らの移住経路と移住の歴史に対する漠然とした方向意識が存在している。自らがタイ・ヌーである根拠として、自分たちが怒江の上流地域から移動してきたという、漠然とした移住経路と歴史意識をもち、内地方面から怒江を越えて徳宏地区にいったと認識している。

③徳宏地区のタイ族におけるタイ・ヌーという自称とは質的に異なる、もう一つの〈名乗り〉の形式は、タイ・ワン Tai Wan、タイ・ラ Tai La、タイ・ホン Tai Xaun、タイ・ティ Tai Ti、タイ・マオ Tai Mao というように、自分の出身村落が立地するムアンを基準にして自己を同定するというものである。徳宏地区はイラワジ、サルウィン上流水系に 20 あまりの山間盆地が分布する。そうした盆地空間は、タイ語ではムアン (Moeng) の名称で呼ばれ、ムアン・ホン Moeng Xaun (芒市)、ムアン・マオ Moeng Mao (瑞麗)、ムアン・ワン Moeng Wan (隴川)、ムアン・ラー Moeng La (盈江)、ムアン・ティ Moeng Ti (梁河) などの名称をもつ。

④お互いの村落が同一ムアン内にあり、そうした必要がない場合には、互いに自分

5) 徳宏地域にタイ・タウと自称するタイ族がないわけではない。遮放地区の遮冒一帯（芒市河沿いの 17 カ村）のタイ族は自分たちのことをタイ・タウと呼ぶ。これに対し、芒市地区のタイ族（タイ・ヌーと自称）は、彼らはタイ・チョン Tai Chong（河川沿いのタイの意味）であって、タイ・タウではないとする（筆者の聞き取り調査による）。

の住んでいる村落を相互に確認するだけである。こうしたタイ族における自己の〈名乗り〉の原則は、ビルマ側のシャン州でも基本的には同じであり、タイ・カムティ *Tai Moeng Khamti*、タイ・センウィ *Tai Hsenwi* というように名乗る。しかし、タイ族同志で交流する場合、タイ・ヌーという自称はそれほど意味をなさないし、また必要でもない。つまり、タイ・ヌーという自称は、タイ族以外の他者、特に漢族との社会的交渉過程において、彼らが自己を名乗る状況のなかで用いられる傾向がある。

⑤タイ族は、水タイ／旱（漢）タイという対立的な分類カテゴリーを本来持たず、あくまでも漢族側の用法であること。にもかかわらず、漢語の普及により、タイ族の側もタイ・ヌーを「旱タイ」と認識するようになってきている。それに対し、タイ・タウは「水タイ」とであると説明される。

北タイのシャン族を対象に言語調査を実施したヤングは、シャン族は言語的に北方シャンと南方シャンとで区別があるとしたうえで、徳宏地区のムアン・マオからの移住者（タイ・マオ *Tai Mao* と自称する）のあいだで、サルウィン川を基準にしてシャン州はムアン・ナー・コーン、ムアン・タウ・コーンとに大別され、前者はタイ・ナー（北方タイ）、タイ・タウ（南方シャン、主にビルマ国内で話される）が分布すると認識されている事実を紹介し、これは中国とビルマの政治社会的区分にほぼ対応すると述べている [Young 1985:3-4]。

筆者もこれとほぼ同じ説明を徳宏地区の調査で確認しており、それによれば、タイ・ヌーは徳宏地区をムアン・ヌー *Moeng Noe*、ビルマ側のシャン州をムアン・タウ *Moeng Taw* と区分し、前者の地域にはタイ・ヌー、後者にはタイ・タウが居住するというのである。これらの事実から、ここで重要なことは、タイ・ヌー、タイ・タウという名称は、居住地となるムアンとはまったく関係がなく、中国とビルマという政治的国境にほぼ対応した分類カテゴリーとして、一般にタイ・ヌーを自称するグループの内部で使用されているものと考えられる⁶⁾。

(2) タイ・ヌーにおける「漢化」の諸相

6) ムアン・マオ（瑞麗）地区のミャンマー側に居住するタイ族（中国側のタイ族と同じようにタイ・マオと自称する）は、瑞麗（ムアン・マオ）地区を含む徳宏全域のタイ族を、タイ・ポ・ホン *Tai Paut Haung*（北部のタイという意味）、タイ・ヌー *Tai Noe*、タイ・ロン *Tai Long* と呼ぶ。このうち頻繁に用いる名称は、タイ・ポ・ホン、タイ・ヌーである（筆者の聞き取り調査による）。

タイ・ヌーと自称する徳宏地区のタイ族も同じタイ系諸族の一派として、言語、上座部仏教、水稻耕作など、多くの点でビルマ側のシャン族と共通する文化要素をもつ。タイ・ヌーがタイ・タウとの比較において、自分たちの文化的特徴を語る場合、言語や文字以外に参照するのは、服装、家屋の形式、栽培稲の品種、農耕技術、調理法、歌謡形式、漢字の「姓」および漢族の儀礼的慣行の有無など、衣食住および風俗・慣習の各方面に及ぶ。例えば言語についてみると、タイ・ヌーとタイ・タウの言語は基本的に同じであり、相互に会話が可能であるが、いくつかの語彙において発音の声調が若干異なっていると説明する。その理由は、タイ・ヌーが漢族との日常的な接触により、漢語から生活方面の語彙を借用し、漢語の影響を受けているからだという。そのためもあり、発音を聞いた時に時にすこし硬い感じを与える。これに対し、タイ・タウはの発音はソフトな感じがするという。

また、使用する文字の形においても、はっきりとした違いがある。徳宏地区のタイ族は、タイ・ヌーの文字の形はやや角張っており、方形である。仏教の経典などを筆写する場合、筆と墨を用いて書くことが一般的である。これに対し、タイ・タウの用いる文字はビルマ文字のように丸い形をしている。いわゆるビルマ側のシャン文字がこれに相当する。前者はライ・タイ・ルー *lai tai loc*、後者はライ・トン・ツァン *lai tong tsan* と呼ばれる。トン・ツァンとは、「南方」という意味である。

こうした両者の微妙な差異や違いのなかで、最も重要な点は、タイ・ヌーと自称するグループは、タイ・タウに比べ、自分たちが漢族との接触・交流の歴史が長く、したがって中国（漢）文化からの影響を強く受けていると強調する傾向をもつということである。さらには、漢文化の先進性を認めた上で、それを多く受容している分だけタイ・ヌーは、タイ・タウよりも文化レベルが高いとみなす、文化的優越意識が表明されることもある。このようなタイ・ヌーにおける「漢化」の問題は、今後詳細に検討していく必要があるが、その際、念頭におかねばならないのは、タイ・ヌーの風俗・慣習面における本格的な漢化の進行は民国期とされている点である。雲南・ビルマルートの開通が大きな契機となり、その沿線地域の芒市、遮放などでは漢化が急速に進んだのである⁷⁾。

こうしてみると、漢文化の受容と漢化の程度を基準に、ビルマ側のタイ系諸族との

7) 中華民国期、徳宏地区のタイ・ヌーの漢化をめぐる諸問題については、趙晩屏が貴重な調査記録を残している〔趙 1939ab〕。この時期には、漢字の「姓」の使用が一般民衆のあいだに普及したが、戸籍や納税の事務手続きに必要となったからである〔江 1950:74〕。この他、清明節、漢族式の木造建築もこの時期に普及している〔張 1987:133、馮 1994:159〕。

差異化をはかり、彼らとの自／他の境界を強調するタイ・ヌーの自己意識は、近代以降に突出してきたものとみなすことが妥当のように思われる。

(3) 「姓」の使用

タイ・ヌーを自称する徳宏地区の土司は、それぞれ漢字の「姓」と家譜を持ち、自分たちの家系の来歴にかかわる起源伝説をもっている。この点はタイ・ヌーの自己意識のあり方を検討する上で重要な手がかりとなるものである。しかし、各土司の家譜にはいくつかの写本も多く、記述内容においても異同がみられ、相互の比較も必要である⁸⁾。詳細な検討は別の機会に譲り、ここでは、民国期にタイ系土司の側が中華民国政府に対し、自己の「姓」の来歴を国家側にどう主張していたかを示す資料を一例紹介するにとどめる〔方 1985 : 218-221〕。徳宏地区の各土司が雲南省政府側に報告したそれぞれの漢字「姓」の来歴に関し、その概要は以下の通りである。ここには当時の彼らの政治的な自己意識のあり方が反映されている。

【南甸】「龚」姓。明・洪武年間、南京人の 落硬が沐英の南征に従い、その功績により加封され、「刀」姓を賜る。現在は原姓（すなわち「龚」姓）に改めた。

【千崖】原籍は南京。明・洪武年間、郝思忠は沐英の南征に従い、その功績により加封され、「刀」姓を賜る。

【隴川】先祖は恭線瓜。明・正統年間、王驥による麓川征服に応じ、その功績により加封され、「多」姓を賜る。

【遮放】先祖は明・永楽年間に隴川より分かれた。

【芒市】「方」姓。原籍は江西。明・正統年間、先祖の方定正が王驥の南征に従い、その功績により加封された。

【勐卯】先祖は循専、南京人。明・正統年間、王驥の麓川征服に応じ、その功績により加封された。

【戸撒】明・正統年間、重慶人の頼羅義が軍征に従い、加封された。

【臘撒】原籍は四川重慶。先祖は况某、王驥の麓川征服に応じ、その功績により加封された。「盖」姓に改める。

⁸⁾ 徳宏地区の土司の族譜については、〔匡 1986〕、〔馬・楊 1986〕などを参照。

これらの事例から分かるように、徳宏地区のタイ系の土司の大半は、明代の洪武年間の沐英による麓川征討、あるいは正統年間の王驥による「三征麓川」と呼ばれるムアン・マオ王国に対する軍事的鎮圧に参加し、それにおいて功績を立てた。それが中国王朝側に認められ、土司に任命されたのだと強く主張しているのである。しかも、彼らの先祖は江西、南京、四川重慶などから移住したとされ、その「姓」は王朝より賜ったものとされている。各土司のこうした自己主張の形式に、自らを漢文化により接近したグループとみなし、ビルマ側のタイ・タウとの境界化をはかる、タイ・ヌーの自己意識のあり方を読み取ることができる⁹⁾。

ところで、こうした自己意識の生成の背景には、中国王朝とビルマ王朝のあいだの華夷秩序的な政治的関係や文化的差異が根底にあるものと思われる。土司制度のもとで、タイ系の土司階層は、先進文化としての漢文化へ憧憬とその吸収に積極的であり、官署内に「教読」という役職において土司貴族や官員の子弟たちに漢文の教養を習得させたといわれるが、華夷秩序的な土司制度の下で、漢文化を習得することは「文化」を持つことを意味し、自らの政治的権威を誇示する上でも必要であった。つまり、華夷秩序の維持にかかわる政治的エリートは、自己を「中華」につながるという自己意識を、それがたとえ虚構であろうとも国家側に対して表明する必要がある、中国王朝の政治文化はそうした方向への傾斜を促してきたのである。

6. 結論

以上の考察を通じて問題となってきたのは、タイ・ヌーの自己意識のあり方に関してである。こうしたタイ・ヌーとしての自己意識が、いかなる民族間関係と政治的・文化的関係性により、形成されたのかは今後さらに詳細に検討していく必要がある。前近代の華夷秩序的な政治支配体制のもとで、中国王朝の周辺部に位置するマイノリティの自己意識はどのように編制されてきたのかという問題の解明にもつながるからである。ここでは、これまで述べてきたことを整理し、とりあえずの結びとしたい。

タイ・ヌーという〈名乗り〉は、中国王朝およびそれにつらなる漢族のまなざしの

⁹⁾ 徳宏地区のタイ系の土司の「姓」およびその来歴について検討を加えた江応樑は、こうした自己意識のあり方、つまり「自らを夷族とみなすことを否認し、漢人の南征に従い、功績により領地を加封された」とする意識は、中国古来の「漢を重んじ、夷を軽んじる」伝統思想から生じ、タイ系土司の側に自らを「非漢人」と名乗ることを躊躇させる心理的機制となってきたとし、実際のところは、彼らは現地で降伏した「夷民」の首長が中国王朝側から土司に任命されたものと解釈している〔江 1992:47〕。

下で、中国とビルマの政治的社会的区分、あるいは政治的国境に対応する関係性において生み出され、ビルマ側のタイ系諸族(タイ・タウ)との対比関係のなかで、タイ・ヌーとしての自己意識が形成されたと考えられる。したがって、彼らの自己意識は、ビルマ文化と中国(漢)文化との関係性のなかで表明される。ビルマ文化の影響を受けているタイ・タウに対しては、同じタイ族としての同胞意識が表明されるとともに、中国(漢)文化との距離の近さと受容度において、タイ・ヌーはタイ・タウとは区別される。

タイ・ヌーを自称する土司階層のあいだには、自分たちの先祖を中国内地から移住してきた「漢族の子孫」[松本 1987]とする伝説が流布している。徳宏地区のタイ系土司の場合、自己の支配の正当性が、中国内地から移住してきた漢族との系譜的關係をもち、しかもその先祖が明朝から官位と領土を与え、士官に任命されたと意識される。ここには、漢文化の先進性を認め、自らの文化的優越性、正統性の根拠を漢文化に求める意識が表明されている。〈華〉を体現である中国王朝と、中国の側からみればあくまで〈夷〉の側に位置するビルマ王朝との政治的・文化的関係性のなかで、自らの支配の正当性を中国王朝から与えられる徳宏地区のタイ系の土司階層にとって、みずからを「中華」につらなるものとして自己認識したとしてもそれは当然のことである。

さらに、こうした土司の家譜のなかで語られる「歴史」は、タイ・ヌーの移住の記憶ともきわめて曖昧な形で重なりあっている。タイ・ヌーとしての自己意識の根拠や正統性の来歴が、中国王朝によって征服される〈南〉の側ではなく、〈北〉の側に由来するのである。こうした力学がおそらく、タイ・ヌーが、タイ・タウとの違いを語り、それとの関係において自らの境界を形づくる根拠となっていると考えられる¹⁰⁾。

付 記

筆者の現地調査は、平成3・4年度(1991年3月7日～3月31日、同年8月5日～8月29日、文部省科学研究費海外学術調査助成金[研究代表者・田辺繁治]による)、平成6年度(1994年8月2日～8月9日、旭硝子財団研究助成金による)、平成8年度(1996年8月23日～9月3日、文部省科学研究費海外学術調査助成金[研究代表者・塚田誠之]による)に、徳宏タイ族チンポー族自治州の芒市および瑞麗地区で実

¹⁰⁾ タイ・ヌーの分布は、もちろん徳宏地区を越えて広がっている。タイ・ヌーの自己意識の地域的な濃淡、差異などの検討が今後の課題となる。

施したものである。

文 献

綾部恒雄

1996 「タイ国における黒タイ族の“民族”的位相」綾部恒雄(編)『国家のなかの民族——東南アジアのエスニシティ』明石書店, pp. 61-88.

馬場雄司

1993 「北タイ、タイ・ルー族の守護霊儀礼と仏教儀礼——『伝統』の創造とエスニシティ」『パーリ学仏教文化学』第6号: 51-68.

チット・プーミサック著・坂本比奈子訳

1992 『タイ族の歴史—民族名の起源から—』勁草書房。

傣族簡史編写組

1986 『傣族簡史』雲南人民出版社。

Davis, H.R.

1909 *Yunnan: The Link between India and the Yangtze*. Cambridge: Cambridge University Press. Repr., 1970, Taipei: Ch'eng Wen.

徳宏傣族景頗族自治州概況編写組

1986 『徳宏傣族景頗族自治州概況』徳宏民族出版社。

徳宏年鑑編輯部(編)

1995 『徳宏年鑑1995』徳宏民族出版社。

方克勝

1985 「建設騰龍辺区各土司地意見書」『徳宏史志資料』第3集, pp. 209-232.

費孝通(編)

1991 『中華民族研究新探索』中国社会科学出版社。

馮霄

1994 「傣族習俗」『徳宏史志資料』第16, 17集(合刊), pp. 157-193.

長谷川 清

1994 「雲南における民族問題の構図—マーガリー事件をめぐる歴史人類学的試論」『月刊百科』384: 11-18.

1995 「『宗教』としての上座仏教—シブソーンパンナー、タイ・ルー族の仏教復興運動とエスニシティ」杉本良男(編)『宗教・民族・伝統—イデオロギー論

的考察』南山大学人類学研究所叢書V, pp. 55-82。

賀聖達

1990 「南詔泰族王国説」の由来と破産』『中国社会科学』3期: 209-222。

胡起望

1995 「跨境民族初探」馬啓成・白振声(編)『民族学与民族文化發展研究』中国社会科学出版社, pp. 127-165。

江応樑

1950 『擺彝的生活文化』中華書局。

1981 「民族学在雲南」『民族学研究』第1輯: 236-260。

1983 『傣族史』四川民族出版社。

1986 「明代外地移民進入雲南考」田方他(編)『中国移民史略』知識出版社, pp. 57-109。

1992 『江応樑民族研究文集』民族出版社。

金春子・王建民(編著)

1994 『中国的跨界民族』民族出版社。

リーチ, E. R. (著)・関本照夫(訳)

1987 『高地ビルマの政治体系』弘文堂。

劉達成

1994 「略論大西南對外開放与跨境民族研究」『民族研究』1994-5期: 27-32。

喜田幹生

1980 「滇辺タイ族とその動静に関する若干の問題—元明兩代のパイ・イを中心として」『中国大陸古文化研究』第9・10合併集, pp. 31-39。

匡大一

1986 「芒市土司史料纂編(初稿)」『德宏史志資料』第7集, pp. 5-23。

松本光太郎

1987 『『漢族の子孫』としての少数民族』『民族学研究』52-3: 246-259。

馬向東・楊常鎖

1987 「南甸土司史料長編」『德宏史志資料』第10集, pp. 206-223。

馬曜・繆鸾和

1989 『西双版纳份地制与西周井田制比較研究』雲南人民出版社。

Ma, Yin (ed.)

1989 China's Minority Nationalities, People's Publishing Society.

申旭・劉稚

1988 『中国西南与東南亜の跨境民族』雲南民族出版社。

末成道男（編）

1995 『中国文化人類学文献解題』東京大学出版会。

孫承烈・張霽

1987 「雲南德宏傣族景頗自治州辺六県和騰冲県各民族的地理分布及歴史来源調査報告」
『德宏傣族社会歴史調査（三）』雲南人民出版社，pp. 41-60。

高谷紀夫

1993 「民族の『仲間意識』と『よそ者』意識——ビルマ世界におけるシャン族の視角——」
飯島茂（編著）『せめぎあう「民族」と国家』アカデミア出版会，pp. 59-82。

Wijeyewardene, G.

1990 "Thailand and the Tai: Versions of Ethnic Identity," In Wijeyewardene(ed.)
Ethnic Groups across National Boundaries Mainland Southeast Asia,
Institute of Southeast Asia Studies, Singapore, pp.48-73.

Young, Linda Wai Ling

1985 *Shan chrestomathy*, Monograph Series, No. 28.

尤中

1984 「元，明，清時期的傣族」『思想戦線』第2期，pp. 36-43, 62。

1987 「明朝“三征麓川”叙論」『思想戦線』第4期，pp. 57-64。

雲南民政廳辺疆設計委員会

1994 「騰龍辺区開発方案」『德宏史志資料』第3集，pp. 169-185。

喻翠容・羅美珍

1980 『傣語簡史』民族出版社。

中国少数民族編写組

1981 『中国少数民族』人民出版社。

張元慶

1987 「德宏傣族社会風俗調査」『德宏傣族社会歴史調査（三）』雲南人民出版社，
pp. 123-151。

趙晚屏

1939a 「芒市擺夷之漢化程度」『西南邊疆』第6期：30-41。

1939b 「芒市擺夷之漢化程度（続）」『西南邊疆』第7期：44-56。